

郷土館だより

Vol. 9 No.2
1986. 12. 1



神号 (東嶺禅師 筆)

目次

江川家と本立寺	1・2
東嶺禅師の生涯と龍沢寺	3・4
小松宮彰仁殿下と三島別邸の造営	5・6
資料紹介 他	7

江川家と本立寺

江川氏の家系を知る史料には「(A)寛永家譜」「(B)寛政重修諸家譜」「(C)系譜」の三つがある。これを要約すると次のようになる。

「寛永家譜」(A)英治—英友—友治—英信—英房—英住—英盛—英景—英元—英吉—英長—英利—大郎左衛門(英龍)

「寛政家譜」(B)英治—英親—英友—友治—英信—英房—英住—英盛—英景—英元—英吉—英長—英政—英利—英暉—英勝—英彰—英征—英毅—英彪

「系譜」(C)源満仲—英治—英親—英友—友治—国頼—英房—英信—久朝—英住—英盛—英景—英元—英吉—英長—英政—英利—英暉—英勝—英彰—英征—英毅—英龍—英敏—英武



江川邸

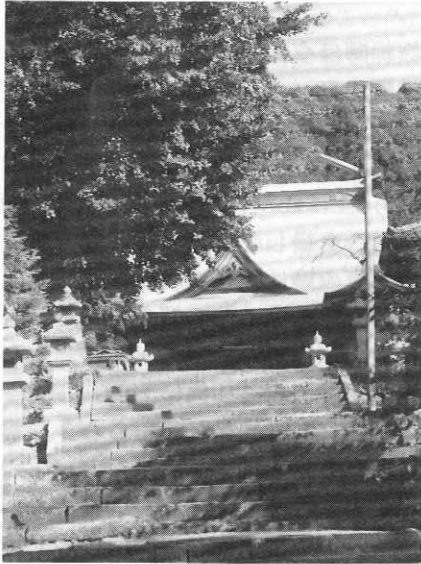
江川家の家歴

以上三つの系図を要約し江川氏の家歴のあらましを記します。

江川氏は源満仲の次男、宇野頼親に始まり、鎌倉時代の執権北條時頼のころまでに伊豆国ハ牧郷(現在韭山町山木)に来住して、しだいに地盤を築いていった。16代英親(英久、義久ともいう。)は伊東に配流中の日蓮聖人の門に入り、それまでの真言宗を改めた。以後江川氏は熱心な日蓮宗徒となる。秋山富南の「豆州志稿」は英親について「後名ヲ義久ト改ム、弘長中釈日蓮、伊東ニ謫居ノ日、英久之ヲ敬信シ常ニ供養ヲ為ス、英久適々家居ヲ修理ス、日蓮為ニ上梁文ヲ親書シテ贈ル其家屋符文今存ス」と記している。江川氏16代の祖英親公は日蓮聖人に帰依して、伊東に配流となった日蓮聖人を弘長2年春(1261年)数日比処に迎え崇教供養をつくした。その時に「優姿塞日久聖人」という法号を日蓮聖人よりいただいた方である。江川家邸宅の屋根下に日蓮聖人自筆の棟札を掲げてあるが、この棟札や曼陀羅をいただいたのも英親公である。英親公の子、英友公は剃髪して本立院と号した。また邸内に大乘庵を建立され、英友公は法名を円立といい、大乘庵に葬られている。江川家は幾代かたって、本立寺を菩提寺として建立

この三つの系図を年代順に比較すると(A)はきわめて簡単に記載されているが、(B)はかなり詳細になっている。(A)(B)ではともに家祖を英治とし、家祖を頼親とする家伝を世間に示した最も古い文献は、秋山富南の「豆州志稿」である。この伊豆の風俗、歴史等の全般にわたる大著は、寛政12年(1800年)3月に完成しているが、この編算について難航をきわめ、秋山富南が英毅に官の後援を願い出ている。英毅はこれを快諾して、寛政6年9月(1794年)書を提出して幕府の積極的援助をとりつけている。英毅はこのとき家伝を掲載させたわけであるが、同時に(C)の母体となるものもできあがったと考えられる。担庵の墓碑銘には「江川家36世・源英龍」とあり、担庵が生前から頼親以来36代目の当主を表明していることがわかる。また家伝のひとつ「金谷十三軒」の伝承も担庵のころまでにかかなり定着していたようである。このように頼親を家祖とし、親信の代に十三騎の従者とともに伊豆に来住したとする家伝が英毅のころから世間に浸透したとみることができる。

したのである。21代、英信の頃から家名を「江川」に改めた。江川家は全国でもめずらしい、世襲代官として続いてきたのである。



現在の本立寺本堂

本立寺の建立と変せん

本立寺は江川家24代、英盛公（久盛ともいう。）が永正3年（1506年）創建したとなっている。江川邸内にあった大乘庵を移し、本立寺を建立したといわれている。「豆州志稿」には英久公の孫が建立したとなっている。また三島円明寺記には、文亀元年（1501年）に建立したともなっている。どれが正しいかわからないが永正3年建立したことが最も正確性があるようである。当時の本堂は大永5年9月4日（1525年）山崩れによって崩れかされ、江川家25代、英景公のときである。26代吉茂公のとき、永禄6年正月（1563年）に再建に着手し、6月竣工している。

本立寺が当初建立されたとき、どのような規模であったかは不明であるが、豆州志稿によれば、菟院が6つもある大寺院であったことが記録されている。菟院には、妙知院、実相坊、大成坊、覚如坊、忠正坊、正應坊、の菟院であったと記されている。その他毘沙門堂、靈験堂ありと記されている。現在はこれ

らの菟院はないが、昭和の初め頃まで、覚如坊、忠正坊は建物が残っていたと記録されている。現在は石碑が金谷区研修センター前に置かれている。妙知院の石碑は庫裡の入口東側に昔を偲ぶ、おもかげとして残されている。

永禄年間、再建された本立寺本堂は天保6年2月5日（1835）年担庵公、在世中に火災にあい焼失している。弘化4年（1847年）再建され、そのときと本堂は草ぶき屋根で現在の本堂より一廻り大きな建物であったという。現在の本堂は大正13年2月29日再建、起工式を行ない、のべ5ヶ年の歳月を経て、昭和3年4月8日に入佛式を行っている。

本立寺が創建されてから、約500年に近い歴史の中でいく度か苦難の道を通りぬけて、現在に致っている。

江川家が建立した寺、そして江川家歴代の墓地、本立寺は江川家の菩提寺である。

本堂の裏山には、江川家歴代の墓碑が列んでいる。一段目の中心に、開山「優姿塞日久聖人」の墓、この墓碑には、江川家当主歴代の方々の法名が刻まれている。代々の当主の墓碑は上部に向かって列んでいる。一番上部の処に源英龍（担庵公）の墓が建てられている。

江川邸、本立寺は、伊豆箱根鉄道、菰山駅にて下車、菰山駅よりタクシーで3分、徒歩でも15分程度で見学することが出来る。このあたりは、鎌倉、江戸時代を通して、歴史探訪の宝庫である。

参考資料 ◎戸羽山瀚修訂編等

（増訂豆州志稿）

◎仲田正之著（江川担庵）

◎本立寺資料集

（館長 永沼朋康）



◀優姿塞日久聖人の墓

東嶺禪師の生涯と龍沢寺



◀ 東嶺禪師頂相

企画展「東嶺禪師展」の準備を進めている。

御存知の様に、東嶺禪師は、名僧白隠禪師を師と仰ぎ、白隠とともに龍沢寺創建に勢力を傾け、白隠とともに諸国教化に努めた、師に勝るとも劣らない名僧である。

しかし、一般的には、東嶺の名は師と比較して、それほど著名ではない。白隠が余りにも偉大であるためだろうか、あるいは私達が無知だったのであろうか。いずれにしても、三島に住んでいる私達には、東嶺禪師について多少でも知る義務が有るように思える。実は、師の生れは滋賀県であって、三島ではないのだが、龍沢寺(沢地)を通じて私達の郷土に深く係わったのであり、その点で師は十分に郷土の偉大な先輩でありうる。

本企画では、師の遺墨を中心に展示して、師の偉大な業績と人物像を表現したいと考えている。遺墨は出生地の滋賀はもとより、所縁の地岐阜等からも出品していただくことにした。無論、三島及び周辺地域の遺墨が企画の特色でもあるから、地域からの出品も多い。

以下、「東嶺禪師展」に先立って、簡単に師の生涯と龍沢寺の創建時代の事を述べておきたい。

東嶺禪師の誕生

東嶺禪師は享保6年(1772)4月14日、江州小幡駅出町(現 滋賀県神崎郡五個荘町)に生れた。父は中村善左衛門、母は露女で、家業は薬屋を営んでいた。後年、師はどこに行っても「生は江州神崎郡 住は花園妙心寺」と言っ、自慢していたと伝えられる。

師の出家の志は5才の時に芽生えた。日向の古月和尚が、島津公の招きで江戸へ赴く途中、たまたま中村家に寄宿したのだった。師は子供ながらも古月和尚に心酔し、大きくなったらこの和尚に師事し、苦しみ多い世間の入々に光明を与えようと思ったのだという。

それから数年を過ぎても、師の出家の志は堅く、父善左衛門に能登川大徳寺の亮山和尚の許にあずけることを決心させたのである。

厳格な亮山和尚の指導の元で、師は14才までに禅門のしきたりを覚え、経典をそらんじ、昔の禅僧の語録から四書五経まで読破し、和尚から学び取るものは全て学び得たという。

諸国行脚

師は17才にして、亮山の許しを得て、諸国行脚の旅に出ることになった。最初の行先は、幼い頃見えて憧れた九州佐土原(宮崎県)の古月和尚の元であった。ところが、漸く会うことのできた古月和尚は、既に年老いて隠栖されていて、予期していたような修業ができなかった。結局師は古月とその後席の翠岩に師事して、両三年を過ごしたのだった。

九州を後にした師は、帰路、天龍寺の桂州(京都)、法常寺(丹波)の大道にも2年程の歳月を費やして師事している。

その後郷里の蓮華谷(日野町杉柵)に草庵を営み、座禅(独撰心)の末、名僧白隠に師事にする決心をしたのだった。

白隠禅師との出会い

寛保3年(1743)、師、23才の春だった。白隠は東嶺の来るのを聞いて言下に「遅すぎる。余は以前よりその名を聞いて待つこと久しい」と喜んで迎えたという。以来白隠禅師の会下にあつて、厳しい修業を重ね、一時は死に瀕する大病に体を蝕まれた事もあったが、有名な『宗門無尽燈論』二巻を著してこれを克服したのである。

師、29才の冬、白隠禅師に修業の成果を認められ、印可(禅門の修業を極めたことを証する書)を授けられた。「我が弟子百人を越えるが、東嶺に勝る者なし」とは、白隠禅師の賛辞であった。その後、白隠あつての東嶺、東嶺あつての白隠と並び称せられ、師白隠とともに宗風高揚のため、諸国教化の日々が始まったのである。



龍沢寺庫裡

龍沢寺の創建と六代目武川倍安

三島の誇る名利龍沢寺。その名は知っている。創建にまつわる歴史までは案外知らない。こと、元禄年間に未開発の蝦夷に足をふみ入れ北海道開発の基礎を作った人々が三島の龍沢寺創建に関わることは、思いもよらないであろう。

『龍沢禅寺開山上堂普説』(宝暦11年)という史料がある。これは、白隠禅師77才、東嶺禅師41才の時、新龍沢寺落慶供養と開山始祖

の披露の法会に合せて唱えられたものである。文中に「駿州松陰寺白隠和尚、於豆州三島北一里沢地村、円通山龍沢寺建立。宝暦9己卯年、同11辛巳年、倍安献250両、為徳元院開基之地。明和2己酉年、再納堂金35両。其後奇捨若干」とある。即ち、龍沢寺は白隠・東嶺両禅師の尽力と倍安の献じた250両で創建されたのである。

武川倍安は、6代久右衛門倍安といい、飛騨出身の豪商飛騨屋の三代目である。

初代倍紹は天正11年甲斐武川庄から飛騨へ移り住んだと伝えられている。飛騨屋を起こしたのは、4代目久兵衛倍行で、元禄13年のことである。倍行は、江戸を経て、最初の店を奥羽下北半島の大畑に開業した。木材商が出発だった。同15年には松前に渡り藩の許可を得て、蝦夷地の木材と海産物を江戸に送っている。以後、飛騨屋は盛運の一途を辿り、6代目倍安に至る。飛騨屋が未開発の北海道で残した数々の足跡は、山林開発、交易、アイヌとの交流、日露関係にまで及ぶ等、極めて多岐に亘るもので、到底ここでは言い尽くせるものではない。

ところで、飛騨屋久右衛門倍安と龍沢寺とはどこでどのような接点があったものだろうか。前記の普説中に、白隠禅師との因縁が記されている。商用の旅の途中で原の松陰寺に寄った倍安母子が白隠に面会している。龍沢寺創建の話は、おそらくこの時に出たものであろう。寺創建は宝暦9年に始まったが、その前年には、飛騨高山の宗献寺に巡錫された白隠、東嶺両禅師は、そこでも倍安母子と会ったものと思われる。

既に巨額の財を築き上げ、仏法に深く帰依した武川家の人々と歴史に残る名僧二人との出会いは、実に運命的な成行きだったといえないであろうか。それにしても、三島の龍沢寺と飛騨屋との関係に、歴史の面白さを思わざるを得ない。

(杉村 斉)

小松宮彰仁殿下と三島別邸の造営

(楽寿園の歴史 2)

楽寿園の小浜一帯は明治23年、小松宮彰仁親王が別邸を建てられた時に整備されたものである。

三島と縁の深い、小松宮の生涯と、三島別邸に関する記事を簡単に紹介しよう。

1. 仁和寺法親王

幕末維新の変革がなければ、仁和寺の門跡として静かな一生を終わるはずの人であった。

伏見宮の第八子として弘化3年(1846)誕生。伏見宮家は四親王家の一つで、天皇家の後継ぎが断えた時、天皇を立てる事のできる名家である。

3歳の時、仁和寺の門跡に決定、仁孝天皇の養子となる。13歳で入寺・得度され、純仁法親王として学問に励まれる。

当時の仁和寺は、数ある門跡寺院の筆頭として、権威を持ち、天正時代の御所を移した建築は、仁和寺御所と呼ばれ、豪華なものであった。(明治25年焼失) 広大な寺内には名茶室が点在し、門前にはかつて仁清が窯を作り、光淋や乾山が遊ぶ、風光名眉な、京文化を育んだ寺である。

こうした還境の中で、小松宮が、洗練された趣味を持たれた事が想像される。

2. 明治維新と仁和寺宮(小松宮)

幕末の風雲急を告げる慶応3年(1867)12月9日、王政復古の決定と共に、明治天皇より復飾を命ぜられ、還俗して嘉彰と称し、議定に任ぜられる。山内容堂・島津忠義等と共に新政府の閣僚となるのである。22歳の若さであった。

当時の朝廷には、16歳の明治天皇を支える皇族は、軍事総裁有栖川熾仁親王だけである。倒幕運動に力を注がれた伏見宮邦家親王の子であること、筆頭門跡仁和寺という権門名声を持っていること、又若く峻才をうたわれた人物であったことで、拔擢されたと思われる。戦の時には、天皇のご名代として、先頭に立ち、天皇を補左する役を期待された。

翌慶応4年(1868)正月3日には、「徳川慶



▲小松宮銅像(上野公園)

喜追討」の征討大將軍(軍事総裁)に補される。この日明治政府と江戸幕府の生死を分けた鳥羽・伏見の戦いが始まる。

4日正午、仁和寺宮(小松宮の旧称)嘉影親王は赤地錦の直垂沢渦緋ひなまゆの式正鎧という古式の正軍装で、明治天皇から、錦旗、節刀を下賜され、白馬にまたがって御所の宣秋門を出発。東寺に入り、征討大本営とした。そこに錦の御旗が掲げられる。

錦の御旗が上がった事で、幕府軍は朝敵・賊軍とされ、戦意が喪失敗走する。ついに、宮は錦旗をひるがえし、幕府の西の処点大坂城へ入城する。幕府軍は江戸へ退却するのである。慶応4年1月10日の事である。

この様子を歌にしたのが、長州藩士品川弥二郎で、日本最初の行進曲「風流トコトンヤレ節」ができる。

へ宮サン宮サン…オ馬ノ前デ、ヒラヒラスルノハナンジャイナ…アレハ朝敵征伐セヨトノ錦ノ御旗ジャ知ラナイカ…トコトンヤレナこの「宮サン」とは言うまでもなく、仁和寺宮の事である。

2月、官軍が江戸へ向う中、この進軍歌が歌われ、志気を鼓舞した。

6月には、会津征討軍越後総督として出陣、9月、会津若松城が降参すると、官軍の司令官仁和寺宮は、参謀長格の板垣退助に攻撃の中止を命令する。

3. 元帥ひんがしと日本赤十字社

こうした戊辰戦争の勲功で、明治2年(1869)賞典禄1500石を給される。この後、宮は有栖川熾仁親王と共に、明治天皇の側近とし

て軍の要職を歴任される。

同3年、東伏見宮と改称される。同3~5年英国へ留学される。帰国後、皇族は欧州の例にならって幼年より軍務に服すべきことを主張された。この意見は受け入れられ、以後皇族は軍人となるよう沙汰がある。宮も陸軍少尉に任官される。

明治7年の佐賀の乱では征討総督を命ぜられ、凱施後、少将に昇進。この間、近衛都督・近衛師団長等を勤め、多くの観兵式の指揮官となる。

同15年12月、小松宮彰仁親皇と改称される。小松とは仁和寺の旧地名である。宮の揺籃の地、仁和寺を終生愛されたようである。

日清戦争では、明治28年参謀総長有栖川宮の薨去により、参謀総長を命ぜられ、3月征清大総督として出征される。同31年元帥府に列せられる。

又、明治10年博愛社（後の日本赤十字社）創設に力を尽くされ、初代総長、後に総裁となる。

上野公園に、小松宮の騎乗像がある。（写真）小松宮主宰のもとこの地で赤十字総会が、たびたび開かれたゆかりにより、明治45年建設されたものである。

明治36年2月18日58歳で薨去。国葬とされた。嗣子はなく、小松宮家は一代で断える。北白川宮家の輝久王が小松家を興し、小松宮家の祭祀を継ぐ。

ここに掲げるのは、小松宮の書である。典雅でやさしい筆使いである。

一生を武人として捧げたとは言え、武勇よりも優雅さを愛されたように思われる。

小松宮の好みが多もよく現われたのが三島別邸の造営であろう。



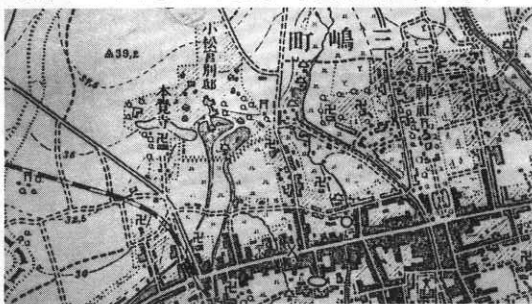
▲小松宮 書

6. 三島別邸（楽寿館）の造営

明治22年、東海道線が全線開通し、沼津・

北伊豆一帯が脚光をあびる。東京から避暑・避寒に来る上流階級の人々が増えてくる。沼津の御用邸は明治26年に完成し、同年より当時皇太子であった大正天皇が毎年静養にみえている。近くには大山巖元帥の別荘や瀬古六大夫の三島館も建てられる。小松宮も又、北伊豆の地に別邸の地を求めたものであろう。

小松宮が初めて小浜の地（今の楽寿園）に見えたのは富士で大演習があった時といわれる。（年代不詳）清水がこんこんと湧き、樹林の中に社や寺院がたたずむこの地を宮は一目で気に入られた。この地が献上されると、別邸作りと、庭園の造成に力を入れられる。



▲明治43年 三嶋町地図

明治24年末には、建物の造営はほぼ終了したようで、同年12月18日家屋建築費として25万円を下賜されている。（明治天皇紀）現在の約15億円にあたりうか。

宮内庁が所蔵している彰仁親王年譜資料（72冊）（明治18~25欠）を見ると、明治25年12月より明治26年にかけて頻繁に三島別邸滞在の記事がみえる。26年12月には「三島御別邸内之糸ヲ以テハンカチーフ両陛下へ献上」されている。現在の公会堂あたりに養蚕所があり、そこで作られたものであろう。ここは後に三島高女（今の北高）の建物となる。

皇太子は、何回か三島別邸に見えている。又、豆州志稿を増呈した萩原正夫は、明治30年、ここで「御避暑中ノ、常宮・周宮両親王殿下に御話ノ材料調査を託サレ孝子中根若思伝其他ヲ起草シ参殿奉呈」している。

有栖川宮も、この地を訪れた事があるといわれ、小松宮別邸は、皇室関係者、特に皇子達のよき保養地であったようである。

ここに描かれた装飾絵画は、明治の一流の画家達によって描かれている。このことについては、又別の機会に触れたい。（福田淑子）

資料紹介

「宿内軒並図」

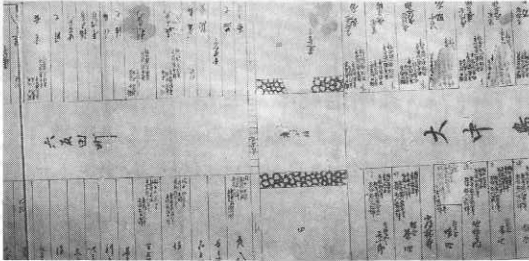
(三島市本町 個人蔵)

これは、瀬古本陣家より伝わった三島宿の軒並図である。全長6m余の巻き紙に描かれている。東は新町橋から西は境川までの東海道沿いの家号・名前が記載されている。旅籠屋など主たる家は間口・奥行・畳数・坪数が記入され、2階は付箋に、畳数等記されている。他に、市ヶ原、二日町、田町、抜戸、裏町、柴町も別の用紙に記され、ほぼ三島宿の全容がわかる。

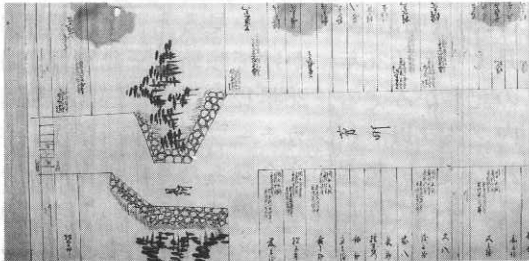
年代が記されていないのが残念であるが、江戸末期の図と思われる。東見附・西見附も詳細に描かれ、広小路の石垣など興味深い。

所有者のご厚意により写させていただき、郷土館では現在解説作業を進めている。

(福田)



広小路周辺



西見附・茅町周辺

※表紙写真

神号 (東嶺禪師 筆)
薬師瑠璃光如来
少彦名大神宮
神農大明神

郷土館 催事予定

東嶺禪師展 61年12月21日～

62年2月8日

白隠とともに龍沢寺創建に力を尽し、宗風高揚のため諸国教化の日々を送った名僧東嶺禪師の墨蹟展

(見どころ)

東嶺真筆の書と画

※参照 P3「東嶺禪師の生涯と龍沢寺」

編集後記

楽寿園の中にあるというハンデにもかかわらず多くの方々が、わざわざ郷土館を訪れ、郷土史や民俗の話をして来ます。有難いことです。市民の皆様を支えられてこそ、意義のある郷土館ができるのです。

珍しい資料がありましたら、どうぞご連絡下さい。又、昔話をしにおいて下さい。

利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日

開館時間 午前9時～午後4時30分

入場無料(但し、楽寿園入場の際、有料)



郷土館だより No.26

昭和61年12月1日発行

(年3回発行)

編集所 三島市郷土館
〒411 三島市一番町19-3
(楽寿園内)
TEL 0559-71-8228
発行 三島市教育委員会